つ　せ　　よ　じ

說序

ふかふり　やふし

Prologue　百万年生きたいと言う男

百万年は生きたいものだと常々言うから、面白くもない冗句かと思えば、突き出た鼻を挟む双眸は真剣そのもの、笑ってよいやら頷いてよいやら周囲を困らせる彼、臍まで隠す顎鬚口髭頬髯を垂らし、悠然と片眼鏡を直しながらキャラバッシュ・パイプをくわえ、ヘビー・スモーカーを装うも、吹かしてフレーバーを楽しむのみの二十五歳だ。

紫煙を肺に入れないことについては、常々こう言っていた、「シャーロック・ホームズは思考中によくパイプを吸っていたらしい。部屋に霧が立ち込めたかのように吸うときもあったようだ。しかし小生の限られた経験に拠れば、一時的に血流を促して思考を目覚めさせはするが、長い期間で考えればアイディアの倦怠化や思考力の衰退を招くように思う」

意外にまともな意見である。

しかしそれ以外はやはり奇妙奇天烈。

16オンスのスキニー・ジーンズを穿き、蛇皮のロング・ブーツはたるんで膝丈までが脛丈へとなってしまい、ザ・ビートルズが『サージェント・ペッパーズ・ロンリー・ハーツ・クラブ・バンド』のレコード・ジャケットで着ていたような、カラフルな礼装用のミリタリー・ロングコートをまとい、ウィッチ・ハット（その円錐形に尖った帽子の山は折れ曲がっている）を被って、ブライトリングのクロノマットを手首に嵌めた男。

さような奇装で、細身のカルカチュアのような彼の容姿は古代メソポタミアのタブレットに刻まれた楔形文字のようなシルエットであった。

そんな人物が「百万年生きたい」などと言おうものなら、天平普蕭（あまひらふしょう）でなくとも突っ込みたくなる。

彼は古い皮革装丁の大きな書物の、羽ペンで記したと思われる丁寧な手書きの文字と色鮮やかな絵との書き込まれた羊皮紙の頁をめくる手を止めて、顔を上げて奇妙な男の方を向いて口を開く。

いやいや、しかし彼も又やや風変わりな風体で、さほど人のことを言えた義理ではない。ボルドー・カラーのベルベットのシャツの上に、サイケデリックなペイズリー柄の大きなカフスの附いた昏（くら）い緑のフロック・コートを着て、水煙管を吸い、肩までかかった長めのマッシュルーム・カットを揺らす。そしてかく言う、

「君らしいと言えば、君らしい。真兮（まこと）くん、幼少の頃から変わり者だったとは言え、なぜ、またそんなことをのたまうか」

「そうかな、普蕭（ふしょう）？　死にたいと思わないのが普通だろう」

「しかし百万年と図々しく言う人も珍しい」

「むろん無限と言いたいのだが、それは神にのみ可能なことで、小生の望むようなことではない、叶うはずもない。謙虚にしているのさ」

「百万年も永遠も同じだと思うが。まったく以て大した謙虚さだな。でも、理由はあるんだろう、長く生きたいとい

う」

「知識さ」

「君ほど知識のある奴もいまい。欲張りだな」

実際、真兮は虚空蔵求聞持聡明法でもやったのかと思うほどに博覧強記で、四六時中書に耽り、万巻の書に埋もれていたが、それでも飽き足らぬと言うことらしい。

「いやいや、餓鬼のように餓えているよ」

周囲を見廻しながら天平は、

「この本を見れば、君が異常に貪欲な読書家であることがわかる。和漢の紙本に就いて研鑽し、古今東西の典籍を舐めるように読み解いているのは、小学生の頃から知っていたよ。同級生ながら賛嘆の眼で見ていたものだ。さすが我が眞神郡に於いて古代より易や陰陽・占星、太占を専らとする学者の家柄だな」

しかし真兮は経典を高く積み上げて城壁のように廻らせて、机上の本の上に肘を突きながら、

「知りたいことがいくらでもある。しかも世の中の動きは止まらない。どんどん知識の数や種類は増え、その上にも複雑さや精度を深めて拡がり増大し、謎は次々解明され、新たなる地平は時々刻々その全貌を明らかにし、見解は常に革まり、考えは進化する。到底途中で止められない。大好きな大河ドラマを途中で見るなと言われるようなものだ。この一大叙事詩劇を最後まで見たいのだ」

そう言う彼の手には、南総里見八犬伝の像入（ぞういり）紙本があった。もとより古文屋で求めたものではなく、代々継いだ品で、祖先が江戸の時代に江戸にて銭で購い求めて手に入れ、子孫に遺した本である。天易真兮は既に数回は読んでいるが、今でも時折出しては声にして読む。読み本とはその名のとおり本来は声に出して佚（たの）しむものであった。彼はそれを実践しているのである。又骨董を愛しむようにその像（ぞう）や和綴の質感や紙の触感を楽しんでいた。

まさに退屈しのぎをしていたような感じだ。だから天平韻蕭も常々思う小さな疑義をかくも尋ねたくなったのであろう。

「暇というよりは」

真兮はそう言い、

「喩えるならば、『高名な依頼人※』の中で、グルーナー男爵が自身のコレクションを愛でながら自分自身の蒐集品に、さらにまだ附け加えられる余地があるかどうか検討している場面があるが、ま、そんなような感じさ。おのれの知識を見渡しながら、この知見の上に更なる新たな地平を見出す道を模索していたんだ」

※ コナン・ドイル著『シャーロック・ホームズの事件簿』に収録された作品。なお、グルーナー男爵は狡猾残忍な殺人者で、陶器の蒐集家としての一面を持つ。

「なるほどね。

君は美男でも犯罪者でもないが。まあ、喩えが正確かどうかは別にして言いたいことは何となく通じたよ」

「そういう君も学生時代から古書店を営んで、大した蒐集家だし、研究家じゃないか。旺盛なる好奇心に貫かれて未知なる大陸を求め、知識の海を渉る渡航者じゃないか」

「しかし退屈し切っている」

「まさに空転するエンジンだな。

さしずめシャーロックならモルヒネか、コカインでも打つところだ」

「たしか『四人の署名』の冒頭だな。デビュー作『緋色の研究』の次がもう、これだもの。デビュー作でも死体を撲打して実験したり、煙草の灰を研究したりとかなり強烈だったけど、よくもまあ、案出したものさ。ま、薬物の使用に関しては、時代のせいもあるんだろうが。

ともかくも推理小説の古典でありながらセンセーショナルなキャラクターだった。実質的に最初の探偵小説がこれじゃあ、後陣は相当辛いものがあっただろうな」

「最初の推理小説の主人公だったオーギュスト・デュパンも個性的だけどね」

「『モルグ街の殺人』か、morgueとは言わずと知れた死体公示所のことだが、いかにもおどろおどろしいじゃないか。又『アッシャー家の崩壊』も冒頭の憂鬱な、おどろおどろしいことと言ったら」

「こんな話をしていると依頼人でも飛び込んできそうだ」

「さすがにそれはなかろう。私立探偵の看板を出しているわけでもあるまいし」

「だが君の知恵を拝借したいとかいう輩は居そうなものだ」

「あゝ、そう言えば」

「あはは、まさか」

「別に依頼というほどでもないが」

紐で縛られた小さな巻物を出す。

「何だい、それは」

「百万塔陀羅尼経みたいなものさ。由来も内容も、いや、すべてにおいて共通項はないが」

「百万塔って、あの奈良時代の称徳天皇のかい？」

「藤原仲麻呂の乱で亡くなった兵を弔うため、罪を清めるために天皇の発願で行われた国家事業だ」

「鎮護国家を祈念するという意味もあったようだが」

「『無垢浄光大陀羅尼経』には、罪を償い、寿命を延ばすためには陀羅尼を唱え、陀羅尼経を小さな塔に安置しなければならないということが書かれている。これに基づいて、陀羅尼を百万巻印刷し、小塔を作ってこれを納め、十万基ずつ大安寺や元興寺、法隆寺や東大寺、西大寺や興福寺、薬師寺、四天王寺、川原寺、崇福寺に奉納した」

「百万って凄いね」

「天平宝字八年（７６４年）から宝亀元年（７７０年）、６年の歳月がかかっている」

「でも、これはそれとは関係ないんだろう？」
「そうそう」
「で、これは何なんだい」
「これも」
紐解きながら、
「精巧な木彫の像の中にあったらしい」
「ほう。何の像？」
「阿修羅」
「へー、いつぐらいの時代のものだろう」
紐解き終わって広げながら、
「彝之家本家の大校倉（おおあぜくら）から出て来たんだ」
「そのせいで保存状態が良いのか。湿気の多い日本では、なかなかこうはいかないものだ」
「楮を使った紙漉きで、虫よけに黄檗が施されている。
日本古来の製法だ。奈良時代のものだろう」
「ふーん。確か、大校倉にある品は倉の中の何処に置かれているかによって、年代がわかると聞いているが」
「そういう置き方を二千年以上している、と言われるが、さすがに二千年だ。一人の人間がやっているわけではないから、確かに、とまでは言えまい。確認のしようもないし」
「だが、どの辺にあったんだ」
「ふむ、一応、古墳時代あたりらしいが。
5、6世紀頃の品が多い、と言われるあたりだ」
「奈良時代ではないんだ。まあ、君の言うとおり正確かどうかまでは断言できないわけだが。
ほう、これは」
普蕭が眼を近附け見ながら、かように感嘆した。
「驚いたな、古代ギリシア語だ、それにこの図画は」
「猪竜（ズーロン）だね」
「しかも彩色されて」
「青色蛇紋石を粉末にして膠で定着させている。
君は（中華人民共和国の）河北省の北部から内モンゴル自治区東南部、遼寧省西部にあった紅山（こうさん：ホンシャン）文明（紀元前４７００年-紀元前２９００年）の遺構から、自らの尾をくわえて輪をなす猪竜が見つかっているのを知っているかね。

実は、それも青色蛇紋石で作られているんだ」

「奥が深いな。このギリシア文字は、いったい？」

「ウロヴォロス・オフィス οὐροβόρος ὄφις さ」

「おお。『自らの尾を飲み込む蛇』か！」

「そうさ。紀元前１６００年の古代エジプトに源流があると言われる古代ギリシアのウロボロスだ」

「完全なるもの、喰らいつつ喰らわれる者、永久矛盾、陰陽の統一、死と再生、永劫回帰、無限性、不老不死、全知全能なる円環、一切、捉えられぬ答、答なき永遠の問い……」

「君は不思議に思わないか」

「この配置は確かに不思議だ」

「恐らくは右から左に書き進める形式だと思うが、右はずうっと、がら空きだ」

「ううむ。

左端に図画、その後に古代ギリシア文字が左から右へ横書きで（当たり前だが）……」

「まるで事実のように此処に在る」

「まるで事実のようにとは」

「事実は空白だ。つまりお手上げだ」

「はてさて、これいかに」

「まず主観（直観）に基づいて考えよう。小生らの基本的日常的な足場だ。直観とは見えるがまゝに原的に観ぜられるものとしよう。

さように鑑みるならば。

小生らの思念の奥にア・プリオリに設けられた『自ら意識の外側に、現に客観的に実在するもの』という意識と観取される。それは一種の思念上のコンセプトであるとも直観される。そういうコンセプトが何であるか、もし何であるかがわかったなら、そのかたちがなぜ選ばれたか、それ以前に、そういう枠があるかどうか（宛行（あてが）われた枠、埋めるべきポストがあるかどうか）は確認されてはいないし、確認の仕方の見当も附かないし、それ以前に枠とは何であるか、その枠のかたちがなぜ選ばれたのか、考えてもまったく思い浮かばず、考えの取っ掛かりさえもつかめない。考えようがない。

次に客観的道筋（論理的展開）によって考えてみよう。

すなわち、さようなる枠があって、その枠を埋めるために適切なものとして〝事実〟という設定が選ばれ、設定が枠に空架されているものとした上で、小生らの措定する事実という概念の規定する規程に準い随うならば、事実というものは外部に客観的に在り、主観に染められず、無色透明でなければならない、と論考される。

つまりさように仮定した場合、事実はない。いや、ないという以上にない。〝無〟は一つの色だからだ。

どのような考えも着附させず、とすれば論理の導く必然によって差異を做す特徴も、特性もあってはならないという考えに帰結する。すなわち無味乾燥で、無よりも無でなくてはならない。〝それがない〟ということも、無も考概に過ぎないから。事実という在り方は実に空だ。空よりも空である。無余依涅槃だ。死と同じだ。小生らは現実というものに手を触れることもできない。

飽くまで小生ら人のなす論理的な思考方法に随うならば、であるが」

「言っていることはわかるが、事実自体が無色透明であったとしても、それを把捉するために認識が着色をするのだとしても、原に相応する何かがあるから、そういうことも生ずるのではないか。原があるから企投するのではないか。方角があるからそちらへ投げるんじゃないか。触れているからこそさような思念も生ずるのではないか。勝手唐突に生まれはしないだろう。

やはり原因があって結果があるのではないか。経験上の確信でしかないが、我々にはこの世には因果律がその王威を誇らかに旗めかせているように思える」

「そうでもないね。

少なくとも主観的には。

たとえば、事物は光の乱反射によって視覚上に映ずる。網膜は光の波長を捉えてそれが視神経を伝わって脳で解釈され、色彩が意識に映ずる。なぜ波長の長短の差異が赤や青や黄色になるのか。その関係性は実存的・直観的（主観的）に見出せない。説明し切れない。経緯不明だ。唐突だ。一方的で勝手だ。

実存的・直観的（主観的）にはさように観ぜられる」

「飽くまでもね。なるほど」

「実存的・直観的（主観的）な直観に基づく設定と枠の解釈不可能性は、考概一般（意識的意識の一切）にも当て嵌まる」

「そうだね」

「考概そのもの（又は考概によって構成される意識そのもの）も亦、実存的・直観的（主観的）に観ずるならば、同じように設定も枠も経緯不明不可解で、そもそも解析不能で、もう『そうだから、そうなんだよ』的な、一方的唐突なる空架・措定としか言いようがなく、考概一般も亦、思惟の及ばざる空の空なる真の空であるという可能性が浮上する。

実存・主観的（直観的）には」

「ならばその判断も脳の作った架空妄想だろう。

いやさ、架空とさえ言い難い、ということさえも…」

「さようさよう永劫なる円環、海に溺れて掻く藻すらもない、宙に投げられ、足も虚しく空を掻くだけ。まったくの五里霧中だ、考えれば考えるほど収拾が附かなくなるものなのさ。畢竟一切事象は得難い。

つまりお手上げだ」

「これは…反論したつもりが却って論戯の罠に嵌まってしまったようだ」

「ふ。そうでもない。可能性としてそうかもしれないという程度の理解さ。そもそも理解とは何か、という問いがある。まあ、その話は後ほどしよう。さて、まずはここで推理だ。

この巻子は、いったい、何を意味するのか」

「もしかして、そのように依頼されたのか」

「彝之家からさ」

「彝之家か」

「さよう。王家からの依頼とあっては、小生のような天易家の一員としては、応えないわけにはいかないのさ。さに非ずや。あゝ、問うまでもない。

我が家こそは天地陰陽二爻の理を知り、八卦を鑑み、天文を読み解いて占星し、骨や甲羅を焼く太占や龜卜を事業とし、占噬の蓍（めどき）を扱い、過去を解いて未来を知り、今の世の羅針盤たる職、古代の学問の家柄。森羅万象のロゴスに聴従する天易家、筏の棹を持つ者、舟の舵を取るもの、方角のない大海で羅針盤となるべき者ゆえ。ふ」

「しかしこれをどう解く」

「あゝ、古来大貴族の家に生まれて、舎利弗（サーリープッタ）のごとく智慧第一にして天叡無双なる天平家の普蕭たる者もこれに降参するのかね」

「見当も附かないね。是非睿智をご披露願いたい」

「よかろう。小生とともにこの謎に当たろうではないか」

第1部　基礎学

第1章　古代の謎

「古代というものは不思議なものだ。

小生らは昨今すっかり近代欧州の論理思考に慣れてもはや古の、そう、特に東洋的なる思惟を失って久しい。昔、人は魂や肚でものを考えていたのさ。

この〝もの〟という言葉も、日本語では西洋のマテリアルやフィジカルとはまったく違う。古代においては、神仏ではない、得体の知れない霊威を『もの』と言ったのだ。だから〝もの凄い〟とか、〝もの狂おしい〟とかいう言い方があるのだ。それが特異なる表出、顕現するもの、存在、知覚し得る事象一般を言うようになったのだ。

だがその前に、そもそも思惟とは何だ。なぜ小生らはこの脳裏で行われる言語の並べ替えによって理解したり予測したりできるのか。なぜこれが事象を解析できるのか、それを以てなぜどうやって了解が生じているのか。よくよく大本から糺して甚深なる思惟を凝らせば（この考えがもう、不可思議のうちにある現象なのだが）摩訶不思議なものだ。

そして恐らくは、それぞれの生物にも、その生にとって必要なかたち・在り方で〝思惟〟が、意識の世界があるに可能性が高いのだ。いやいや、そう安直には言えないか。何しろ、その立場に立てないのだから、永遠にわからないはずなのだ。

いや、その意味では君に意識があるのかどうかさえ小生には確かめようがないとも言える。

さように思えば古代人が肚で物事を理解したとしても何ら不可思議はない」

「なるほど。

すべては生の命題、〝生きる〟ということのための便宜に過ぎない、と措定すれば、人間を一定の行為に導く効果さえあれば、本質性などどうでもよいものだとも言える」

「そう。我々は古代の思惟に当たるとき、謙虚な気持ち、敬虔な気持ちで当たらなければならない」

「それが前段かい？」

「そのとおり、では、これを踏まえて思考しようよ」

と言いながら真兮はおもむろに指差し、

「さて、見たまえ。ここだ。

先にも注目したが、一番これが目に付く、この空白のところだが」

「そうだね。

そしてこのあからさまな表現には、素人でさえも安易に或る思いへと至らせるものがある」

「さよう。本来冒頭から前段中段であるべき主要な部分がまったくの白紙状態、これこそは」

「うん、空白は真空、晰らかに『空』を言っているんだろうね」

「まったく下世話過ぎるくらいに」

「だから余りにポピュラー過ぎて逆につかみどころがない、広過ぎる。いきなりここから思考を重ねるのはムリだ。あたかも大海か大沙漠にさ迷うようなものだ」

「然り。

他に考える要素があれば、そこから攻める方がよい」

「たとえば、なぜ阿修羅像の中だったのか、とか」

「猪竜（ズーロン）にウロボロスのギリシア文字が添えられていたわけは何か、とか」

「時代の意味も考えるべきだろうな」

「今のところ、時代が特定できないが」

「猪竜（ズーロン）とウロボロスに直接の繋がりがあるかどうかはわからないが、人間の意識の底にア・プリオリに在る一つの根源的イメージで繋がっていることは十分あり得る」

「つまり永遠と無限というものを希求する魂が円環という物にその具現を見出したということか」

「そう、繋がりはなくとも、脳髄奥の出所は同じだと考えられる」

「飽くまでも推論、状況証拠的でしかないが」

「それは已むを得ないことさ。

さて、人はなぜ永遠無限を希求するのか」

「ははは、それは君と同じだよ。

百万年生きたいからさ」

「然り、そして又然り」

「そう思えば、龍樹大菩薩の延々と大敷衍して已まない『空』への執著もそこにあるのかも。まさしく空は無限だし、永遠だし、絶対否定され得ない」

「さすれば自ずと阿修羅もそこに繋がってくる」

「阿修羅、すなわちヴェーダ神話のアスラか」

「さよう。

一切であった光の神アスラだ。森羅万象の素であったアスラさ」

第2章　三つの難問

第1節　序論・論理の原蛇

「だがこの奉納者、この作者は結局、何がしたかったのだろう」

「永遠の真理の成就による永遠の生への祈願、…かな」

「ふむ」

「まだ考えなければならないことはいくつかある。

この時代、ギリシア文字を知っていた者は誰か。なぜ猪竜（ズーロン）とウロボロスを娶わせたのか。同一視したのか。

円環に対する（我々と同じような）解析をしたとしても、異種の組み合わせでなくとも、その目的は達せられたはずだ。にもかかわらず敢えてする理由は何か」

「もし古墳時代だとして、永遠の生への希求がウロボロスに具現化されているという哲学を持った人間が当時日本に在り得たか、という疑問も湧く」

「ギリシア文字に関しては、我が一族に限って言えば不思議はない。小生ら眞神族は西方から紀元前7百年代に日本列島に渡来した。その起源はアフリカとも言われ、人類の移動を縮図であるとも言われている。現にクレタ島やマケドニアと推定される土地にいたとの史書もある」

「どうかな。彝須灌斗（イスカント）の時代は紀元前2千5百年代から始まる。ギリシア文字はまだないだろう。蓑之国（みののくに。クレタのミノス王のことか）に至っては紀元前3千5百年代からだ」

「小生は文物の交流が渡来後も続いていた可能性を言っているのさ」

「なるほど。古来富裕の眞神族の富は交易によるところも大きかったから、あり得ない話ではない」

「と仮定しよう。

文物の往来が連綿と続いていた、と。恐らく寸断は江戸の鎖国時代ではないだろうか。もしくは秀吉か。いずれにせよ、そういう切り口の研究はまだ稀薄であるから、よく調べないと何とも言えないが、現在では断絶、散逸して久しいことは確かだ。

すると、この作者の時代までは古典ギリシアやローマ、東西ローマの没落も比較的情報があり、知っていたことになる。そんな者が敢えてギリシア文字を使い、中国大陸の聖獣を扱うという意図は」

「ギリシア哲学を仄めかし、地域による差異のない真理の存在を暗示し…みたいな感じかな」

「パルメニデスの存在論やヘラクレイトスのロゴス論を孕むと想像しよう。形而上学だ。理性に基づく論理哲学の起源及び基礎だ。それとは対極にある東洋の大哲学、中華の哲学の源泉である龍の象徴」

「龍が哲学…」

「そうだ。それもまた東洋の哲学だ。小生らは西洋の思考に馴染み過ぎている」

「お手上げだな」

「そうかな。元に戻って、ほら、これを観たまえ。この文献上で優位を示す空なる図を」

「ああ、そういうこと」

「空の論が君臨し、その後に東西の思想が昇華、統合されている、もしくは東の優位、西洋の思想も東洋の思想に含まれるということの象徴」

「ううむ。そこまで読むか。やや妄想では」

「さらに深読みしよう。

ここに表現されているのは論理学のパラドックスだ」

「ほう」

「論理は解析・論証がその本道だ。論理が成立しなければすべてが成立しない」

「すべて？」

「頭に在るすべての意識、考慨及びそれを紡ぐ諸々の思念は論に拠って解析され、証明され、了解されている」

「なるほど。論なくば何であるか、どこへ逝くかもわからない。手綱なき奔馬、舵取りなき荒海の舟だ。収拾がない」

「すべての差異は成立せず、すべての選択は崩壊する」

「なるほど、事象の特性は論によって差異を示すから論なくば差異もない。差異なくばどちらかを選択することもない」

「一切の観察は放置される」

「なるほど、特性なくば解析が成立しないからな。色彩も形態も運動もない。音階も音調もなく、寒暖もない。臭いも味もなく、喩えるならば何処を見ても真っ暗闇か無限の透明を見ているようなものだ」

「論理が証しとして成立するのはその客観性だ。主観的ではないという点に於いてだ。誰がやっても同じ道を辿り、自分の主観に左右されない道筋だからだ。飽くまでも原理的原則的にだが。

だがなぜ客観性は論証として正しいのか。恣意的ではないと、なぜ事実に即していると言われるのか。むろん理窟、原因、根拠はある。だがそれらが論理によって成立していることを考えたまえ。論理を人格とすると論理は自己証明自己弁解しているのだ。論は論によって自らが正統なる真理の裔であり、真実に即する妥当性を主張している」

「そういう言い方をされると何だかいかがわしく感じられる。これは主観的だが」

「不正に感じられるだろう。では逆に小生らが論理に期待する理想的な姿、最も完全で論理としての本質性を成し遂げていると思われるあるべき論理の姿とはどういう風であろうか」

「思い込みや願望などの主観や、先入観などによる偏りがない、ってことかな」

「そうだね。客観性、或いは純粋性だ。それが論理の理想形だ。あるべき本質的な姿だ。

偏りなく何色にも染まっていない零の状態から出発して、純粋客観なる公正な論理を構築する論考に拠って証されたものしか信ずるに足りないという考えこそが論理の真髄だ。

先程、論理は解析・論証がその本道と言ったが、解析も論証のための解析であるとすれば、論理は一統論証に収斂されるべきかもしれない。

さて、しかしながら現実を顧みると、実際にそういう論を吐く人は少ない」

「なるほどね。

たとえば、君がさっき言った東洋の優位性は、君が東洋人である以上、東洋至上主義的な結論が君の心の何処か片隅にあり、それによりその結論に導かれたのではないか、と糺されたとき、君は絶対の自信を持って応じられるか。君の論理的潔癖に誓ってそうではないと、どうして言えるか。偏りなく、純粋客観的であったと、どうして言い切れるか」

「そう、そう、そういうことだ。殆どの人間の精神は、先ほどの小生の如く自己肯定的に働く。自虐史観的な人間は

そう働かないが、彼らが純粋客観とは限らない。人には様々な自己肯定の方法がある。自己否定というカタチの自己肯定やら、自己満足やらがある。自虐及び自己否定が清廉の精神を感取さしめるとき、またアンチ・テーゼの喜悦が感覚を襲うとき、それは肯定的な感覚として自己を擁立し、声援のように心を昂らせる。

実に自己肯定の欲は拭い難く、純粋客観とは得られ難い。それを常に念頭に、人は自分とともに他者をも解剖すべきだ」

「一理も二理もあるが、そこまで裏の裏を疑われ、純粋かどうかを検閲するにあたっては苛烈細密な注文を附けられると、もう誰も何もできなくなるな」

「常に批判が必要だ。

批判されないものは腐敗する。共産主義は本来的には民主主義の理念をさらに完成するために公正性と平等性とを高めたものであり、謂わば発展バージョンだが、現実世界では腐敗と堕落でしかないのは、一党独裁体制のせいで批判がされないからだ。批判は常に念入りに、他者による監査を以て為され、かつ心を解剖するような自己による解析に基づかなければならない」

「まあ、確かにね。

しかし水がきれい過ぎると魚も住めないぞ」

「さよう。実践問題については別の日に話し合おう」

「ふむ」

「話を戻そう。

純粋客観の論を吐く人は少ない、というよりか皆無だ。なぜなら論考の運航を規定する規程、論考の進め方の方法論の規則がその戒律や構造によって自己矛盾して破綻し、到底、純粋客観などではあり得ないからだ」

「何となくわかってきた。それで自らを咬む蛇か」

「蛇は咬まれているのか、咬んでいるのか。論考運航規程は論証され得ない。運航の規程に拠るならば、すなわち論という方法論の規則に準い、これに遵うならば、論証の済んでいないものは論証に用いることが出来ない。未論証のものを以て為した論証は無効だからと規定されているから。しかしそれだけではない」

「なるほど、論考が未検証なら（論というものの構造自体が自己破壊的なら）、論考を未検証と決定する検証も決定しない、論考は未検証とさえ言えない。かと言って是とすべき根拠もない」

「根拠なくば是に非ずとする〝運び（運航）〟も亦論考であり、論という構造体の必然的な戒律であることをも含んで〝考慮（論考に依拠する配慮）〟すべきだろう。いや、すべきなのかな（笑）」

「無理だろう、いや、もう何と言っていいのかわからない。何も言えないということさえ言えないのだろうから。いやはや、とてもかくても候、だ」

「その根拠が論考運航規程自体にある、という不可能性の自己矛盾、不成立の繰り返しに窮する永劫 fugue だ。これ

が原蛇の象徴する奥義だ、自らを食む原蛇は最後に食い尽くされるのか、無くなれるのか、喰らわれ尽くされるか、食い尽くすか、口はその口を咬むか。論はその結末を観ない。双眸は双眸を見ることができない」

「未検証だからと言って、論考を用いないことはできない。すべては意識であり、まともな意識はすべて論考を用いるから」

「だから人は根拠のない侭、それを無視し、何かを無条件で是認し、すなわち純粋客観ではなく、不純なる客観によって、検証すべき何處かを適当に端折って

「確かに無理矢理に、思い切って、えいやっと飛び出さなければ、論考というものは成立し得ないだろうな」

「そう、何もかも唐突なのだ。無根拠の侭、措定して進まない限り歩めない。突如現れ、忽焉と消えることを容認しなければ何も考えられない。既に意識はさように進行中だ。君も今観るとおり。

ほら」

そう言って真兮は両掌を差し出した。普蕭も腕を組んで頷き、

「我々は思考に於いて論考以外のどんな手段もないから、これは必然的な矛盾だな」

「これは解決のない問いだ。未遂未収だ。捨置除却、〝現状渡し〟だ。すなわち空だ」

「わかってきたよ。

だが君はそれがこの図案と文字の意義だというのか」

「そうかもしれないし、そうでないかもしれない。そもそも論考によってわかったからと言って何になろうか。客観的にも、主観的にもね」

第2節　1論・運命の岐路

だが普蕭は反論した。

「そう言ってしまえば身も蓋もない。

たとえ破綻であっても、現に我々は実存している。生活している。これは肯定だ。Presenceだ。Positiveだ。事実的だ」

「それがどんな了解であろうともね。つまり〝事実〟というものがまったく未解析かつ未明晰で、その考概の定義附けが未遂未収の侭であってもね」

「でも生きていける」

「そう。生命は不思議だ。そもそも考概を分析しようとする意欲、これら疑問への欲求も、生への意志から生ずる。生は意志だ。一つのベクトルを有するから。

生存のために総動員されている。だが生存は個体よりも種としての生存を優先し、最終的には生態系としても成立

を優先し、宇宙全体としては宇宙の存在を優先している」

「話が飛び過ぎだよ」

思惟に耽る真兮はその言葉を無視し、

「なぜ生物はこのように進化するのか。又なぜ間違えることなく食物を択ぶのか。なぜ神は試練という廻り道を方法論として設定したのか。なぜならば生命は障礙を越えて自己を超え、止揚するから」

「不思議だね」

「されど待て。それらは選択という存在を前提にしている」

「何だ、その芝居がかった言い方は。

まあ、確かに、一切の現象は無限の可能性の中から一つもしくはいくつかが選ばれて現在に繋がっていると普通は考えているよ」

「論理は論証であると最初に言ったが、論証とはいくつかの中から又は無限の中から一つを選ぶことでもある」

「そうだね」

「そう思うと選択というのは侮れる概念ではない。むしろすべての根本にかかわっている。結局、二律、すなわち正誤善悪真偽とかも選択だ。論理性は選択を基礎に持つ、と言っても過言ではない」

「うむ」

「だがそれは真実だろうか。未だに選択肢は本当に有り得たかどうか議論されたことはない」

「そんな莫迦な」

「正確に言えば検証のしようがない」

「え」

「なぜなら個別の結果は必ずどちらかだからだ。もう一度やってもそれはもはや違う事象だからだ」

「そういうことか。それなら、確かにそのとおりだ」

「だからと言って無いという確証もない。これに関してはfifty fiftyだ」

「そう思うとさっきのベクトルの話も根底から崩れる。もし他の可能性がないなら、それは一つの方向性ではない」

「そのとおりだ。

さように考えると、生命への意志と言うべきベクトルは不思議でも何でもなくなる。そうではないと想定されているから不思議に思われているわけであって、もしこの世にはそれしか存在しないなら不思議はない」

「そうかな、なぜその一つであるかが不思議じゃないか」

「それも他があるという想定じゃないか」

「あ、そうか」

「選択肢がないという論考はないからなかなかイメージが描けないと思うが、この『選択肢がない』というのは、す

べての問いを或る意味で解消するのだ。
解決ではないかもしれないが」
「なぜ非存在ではなく、存在なのか、という永劫の問いも消えるね」
「そして忘れてはならないのが、すべての考概が客観的には論の着陸不能な永劫自家撞着で自滅し、主観的には一方的唐突さによる行方知れずに永久に茫然自失し、中途の侭、結果のない状態でいるということ、未遂不収のまゝでいるということだ。
と言っても、これも論考で、論理に依存するがな」

第3節　2論・観察の構図

憂鬱な表情で普蕭が言った。
「しかしかように考えつつ、我々は、いったい、何處へ行くのか」
「さてね。
しかし答がないと言っても、生きる以上は右に行くか左に行くか進むか待つか決めなくてはならない。
そういう意味では選択は確かに可能性の領域では実存するのだ。
人は義しいと思うことをしなければならない」
「まあ、さっきも言ったように現に実存し、実際に生活しているわけだからな」
「小生らは確実な検証はないという仮の前提を措定した上で、実存に基づいて判断していくのが最善だろうな。そして決めたら果敢に行動する」
「正しく我ら眞神族の格言どおりだな。『人、堂々果敢すべし。人、義しきと以（おも）ふを爲す善し』か。結局古人の智慧に帰結するのか」
「だからこの原蛇の意味が深くても不思議はないのだ」
「そう来たか」
「しかし判断に当たって小生らは知っておくべきいくつかの前提がある」
「まだあるのか」
「先ずいくつかの事を予備的に研究する必要がある。
我々は判断に当たって経験を参照する。すなわち自己が知り得た事象を基礎にする。直接と間接とを問わずこの知ったということを観察という名称とする、と定義するとしよう」
「急に授業みたいになったな。観察は論理の自壊破綻でダメなんじゃないのか」
「もしそうでなくともダメなんだ。

自己の心象を照らし、考えてみたまえ、この観察とは何か」

「視覚で見るか、心で観るか、つまりは知覚によって観ることだろうな」

「観る（見る・看る）とは何か」

「何かを脳裏に表象（ファンタジア）することかな」

「その考えに含まれる思い込み（断見・ドクサ）を一応、認識しよう」

「まあ、生（なま）の想いだから、いろいろ思い込みはあるだろうな」

「観察とは物理的か、心象的か、いずれかのカタチで、観察者と観察対象との対峙を前提にしている」

「そうだね」

「だがそれは証明されていない。自分が対象と対峙している様子を観察できないからだ。双眸が双眸を見ないのと同じだ。自分が対象と対峙して対象を観察している様子を直截観ることはできない。だから観察者と観察対象とが対峙しているという構図（対峙図）は事実であるか否かは証明できない。そもそもその根底が崩れれば、観察自体が正しいかどうかなどもう論外になってしまう。正確妥当かどうか以前の問題だ」

「鏡に映せば？」

「それも観察じゃないか。鏡に映った自分の状態を観察している。その観察が未検証なのだ」

「そうか。じゃ、他人がやっている様子を観察し……あ、だめか」

「だから観察が事象をその侭に観察している、という判断はそれ以前の時点で既に怪しい。小生らが事象を素の侭に観ているという思い込みは当てにならない」

「先ほどの議論でも事実は把捉できない、ということだったな。観察も把捉できないということか」

「さよう。解明不能だ。

我々は客観的実在が自分の外側に在ると想い込んでいる。そうでなければ諸々の感覚が生じるはずはない、感覚は応じて生ずるのだ、と。

だがそれは確かめようがない。見渡しても探っても何も捉まえられない。一方的唐突である可能性もある。だが結局はそうであってもなくても、同じことなのだ。思念考概自体が実存的には唐突にしか観ぜられないし、論理を用いる限りに於いて論理は破綻しているし。

これは実存的・主観的（直観的）に解明不能という分類になる。

しかしながら小生らは対峙という想いからなかなか逃れられない。人は反駁するだろう、『実際に外側に何もないなら、なぜ刃物で傷が痕するか』と。又『ないのに、なぜ銃で死するのか』とも。

むろん、そうだ。

だが苦痛ではあっても傷は傷でなく、死は死ではないのだ。苦痛も客観事実ではない。脳内で造られる。出なければ麻酔は効かない」

「なるほど。

とは言え、（矛盾する（しかし実存は飽くまで実態なので論理的矛盾を気にしない、そんな禁制に囚われない）ようだが）実存的には殆んど客観的事実だ。切実だし、迫真して危機感を煽るし、我々の力の及ばないという点ではまさしく現に実在する現実だ。現に痛いものは痛い。我々はこれを回避するために行動せざるを得ない。まさしく実存だ」

「さよう実存に従うしかない。だが何の保証もないことも知るべきである。局面によってはそれが重要である。岐路はないと言っても運命を知る者はいないのだから実存的には運命は存在するのだ」

「観察は安全性の面で確実性がない。観察（経験）に基づくすべての判断には絶対的な保証はない。とは言っても他がないから、実存の奥から湧く声に従うしかないのだが。ただ完全な信頼を置くなということだな」

「観察がその為体（ていたらく）であれば、そもそも意識とはどういう状態なのか、疑問になるが、それも解明不能であると言わざるを得ない。

さらに意識というもの、了解というものへの疑問も湧かざるを得ない。知りたいという希求が」

第4節　3論・理解とは何か

「畢竟、理解とは何か」

「こうなると言いようがないね」

「まあ、強いて言えば、『今の、この瞬間に、将に（まさ）（意識として做（し）ている）これ』だ。

既に対峙の構図は崩れた。意識とは、何を、どうしていることか、いかような状態か、を言えない。だから『これ』としか言えない。ｉｔみたいなもんだ。

とすれば、〃これ〃を考察しようがない。唐突に〃何處〃か〃わから〃ない〃現場に〃投げ込まれたかの気分、喩えるならば、上下左右前後がなく、かつ無限に透明な空間を観るような気持だ。

もし考察のしようがあったとしても、実存的にも論理的にも考概が当てにならないとされているし。

つまり主観的に『どう考えてよいかさえわからない』という直観、客観的には『論理は論理を是とする限りに於いて決着不能な永劫矛盾』という論理的分析によって、行方もなく、方向すらもないということだ。

いったい、この思念は何か、現にしているこの意識は何かという問いは途方に暮れる。了解は、理解しているというときのこの理解とは何か、という問いに答えられないのみにあらず、問いとは何か、どういうことが起こることか、どのように確かめたらよいのか、確かめるとは何か、何かとは何か、何とは何か、論理的にはどうしようもない問いだ。だが論理以外でどうかすればよいのか。しかしさような分別意欲（疑念）解析推定決断は既に論理の内ではないのか。どうしたらよいのか」

「まったく以て、どう考えてよいかさえわからない、だね」

「考え（意識）自体が得体のしれない、意味不明な、藪から棒な、異物になっている」

「ちなみに、この期に及んでムダことを訊くのかもしれないが、コギト・エルゴ・スムという証明方法は無効なんだろうね」

「思うから思う主体があるという妄想は行為には行為者があるという前提を無条件に是認しているドクサだ。観察の対峙図が証明できない以上、主体の証明は不可能だ。論理的には。

では、主観的には、どうか。

たとえばどれでもいい、今、君の心に湧く想いを一つ、もしくはいくつか捉え、解析したまえ。

却説（さて）、想い泛かんだかね。

泛かんだなら、それら諸考概がなぜ〝それ〟であって非〝それ〟ではないか答えられるか。

だが説明できないからと言って何だと言うのか。説明とは何だ？　小生らは何処にいるのかと周囲を見渡し、これは、いったい、何のことか？と問わずにいられないこの動機は何か。

知ったつもり、わかったつもりのそれぞれを、ふん捉まえてよく精しく分け捌き解いて看て考えよ。とことん無限に問い詰めよ。

畢竟、残るものは、AはAだからAなのである、ということだけだ。同義反復（tautology）だ。残っているものは、ただただ納得という心的な現象だ。心情しかない。先にも言ったとおり、すべての了解は唐突だ。ただわかったという心情があるだけだ。実存的にそのような結論になる」

「すべての理解は慣習に過ぎない、ということ…か」

「いや、そうかもしれないし、そうでないかもしれない。

少なくとも、小生らは小生らが何を言っているか知らないらしい。心象は小生らが起こすと言えるか？　自らが操っていると言えるか。あたかも既に用意された乗物に乗せられているだけではないのか？　論考運航規程というベルトコンベアでオートマティックに運ばれているだけではないか？　どうしてそうじゃないと言い切れるのか？

この時点で主体がどうこう言う議論が崩壊する。

実存的に、さよう観ぜられる。だがそれも与えられたものに過ぎないのか。いやはや、思考を凝らしても、西も東もわからない」

「主体性はその設定自体が虚しいということか。当然、枠も」

「これは結局、理解への見解にも繋がる。

理解とは、理解した・得心した・腑に落ちた・猜疑の情が収まった・解決したと感じる心的な現象に過ぎないとも言える。

ついでに言えば、わからない、も同じだ。わからないという心情があるだけで、これが何のことか見当も附かない

状態だ。理解不能は理解の一形式として理解の情に包含される」

「どんな結論に達したとしても、そもそも意味がないね」

「違う角度からも言おう。

たとえば、自己の尊厳を踏み躙られて憤慨するとき、その自尊心は自分が作ったものか。では、なぜ非自尊心ではなく、自尊心なのか答えられるか。

それが主体性ということなのか」

「光合成のような化学的な現象かもしれない。少なくとも思考は化学的な現象だ。イオンの移動によって生じる電位差の関係が変化することによる起こる電気的な発火現象、インパルスだ。インパルスに起因して起こる神経伝達物質の起こす脳内の現象だ。思惟も感情も化学的な現象で、心は物的な現象なのかもしれない」

「然りそして又然り」

「とすれば、思惟の内容とは、水が熱せられて蒸気となって空に上がり、雨となるのと同じだ。それが思惟だとすれば、考概は空ですらない……」

「しかし待ちたまえ。

思惟が化学的な現象であるという結論は観察に基づいている」

「あゝ、そうだ。観察かあ」　そう言って普蕭は寂しく笑った。「僕らは只管未解決のまゝ、ただ呆然として立ち尽くすのみ。

意図的ではない放置だな」

「まあ、それがこの小さな巻子の空白なのさ。何も書かれていない、ただの紙だ。ふ」

第2部　実践応用篇

第1章　実存の奥からの声

「だったら」

普蕭は不満げに言う、

「表現する必然性がない。まあ、誰にも知られないこととなってしまうが、何もしなくとも同じことが表現できていることになる」

「しても同じさ。知っているのに何もしない方があざといかもしれない」

「知らなくとも知っているが、知っていても知っていることにならない」

「どうだい、茶でも飲まないか。小生らにも生活がある」
「ああ、しかし何事も知ってしまったら後戻りはできないものだね。気分はもやもや、釈然としないよ」
「古代格言のとおりさ。義しいと思ったことをするしかないよ」
「義しい方を択べない」
「自然に遵うしかない」
「自然？」
「心の声だ」
「心？　人の心は自己肯定の意欲に盲されている」
「別に純粋客観である必要はない。それはもうわかるだろう」
「そう。しかし、『わかるもわからない』だし、『わからないもわかる』だ」
「龍の如く肯んぜよ。これも古代の格言だ。龍は小賢しい理屈なんか言わない。堂々果敢するのみだ」
「ふむ」
「この大海に筏で乗り出すには棹が必要だ」
「棹、か」
「意志の力さ。結局小生らは生きて行かなくてはならない。それは既に何もつかむ物のない大海で心の声に遵うということだ。
真の心の声を聴き分けるんだ。動物達が自分たちの食べるべきものを誤ることなく見極めるように」
「思惟は論理ばかりではないかもな」
「そう。場合によっては、意識の新しい次元を啓くこととなるかもしれない」
「何だか希望が見えてきた」
「人は希望がなくてはいけない。つまり未来がなくてはいけない。生きることは未来ということだ」

第2章　超越の新世界へ

普蕭は暫らく思いに耽ってから言った。
「新しい次元か。
そうか。
生命というものを生物学的なエントロピーの増大に抗し、組織を再生によって維持し、増幅によってそのポストを維持しようとする化合物であるとすれば、たとえば、時間や空間や物質（生命活動も物質の化合である）一切の総和としての宇宙全体はその体を維持しようとするベクトルにぶれがなく、生命体と言える。時間や空間は存在ではある

が、物質のように時空を占有しないので、いわゆる体をなさず、情報のみの生命体とも言える。まあ、考えようによっては、或る一定の期間で骨まで（脳細胞を除く）すべて新陳代謝で入れ替わってしまう小生ら一般の生物もその本質・本体は（肉体ではなく）情報だとも言えるが。

それはさて置き、つまりは情報生命体としての宇宙の智慧に到達するような叡智に人間が到達する、至るかもしれない、ということだとすれば、大いなる未来が開けたような気がする。

それはさぞかし仏陀の悟りのようであろう」

「解脱は結論的に生存の概念・存続の構造を否定した。

空の観念を用いて。

無余涅槃は物理的な死だ。

生命とは一般的に言えば、（君が言ったように）エントロピー増大に抗して持続し続ける化合反応だ。新陳代謝による自己再生（自己維持）と自己複製による増殖だ。

全体的に言えば、維持より複製が重んじられている（観察の結果だが）。だから愛は尊い。子孫を残すからだ。個体の存続より愛が優先されるのはそのためだ。つまり生命も存在全体である宇宙の意志の一部であり、宇宙の生命の意志に従って、宇宙の構成要素の一つとして、その役割を演じ、その坐を埋めていなくてはいけない（ポストを埋めていなくてはいけない）。

だが仏陀はそれを超越し、宇宙の意志をも超える新たな地平を啓いた。だから解脱のようにというのは正確な言い方ではない。

解脱は宇宙の真髄の上だ。いや、宇宙の真髄よりも根源であり、宇宙の真髄よりも深い」

「宇宙は無から生まれた…無すらもない無から。

いやはや、壮大過ぎる話だな」

「だから森羅万象の形態を持ち、万能自在無碍で宇宙の起源である阿修羅の像の内にこれを封じた者は、この巻子に込めた空論こそ、宇宙の真奥であり、精髄であり、心臓であると言いたかったのかもしれない。

これは空想に過ぎないが、彼は天の住人にも等しい智慧の持ち主で、この凄絶なる真理を、知性を超えた超越的な睿智で知覚していたのかもしれない」

「誰だろう。

我らが眞神の史書には何か記述がないのかな」

「事蹟を遺した者や官位のある者なら、それこそ校倉か文書院の蔵に何か資料が残っているだろうね。木像の木材を科学的に鑑定することが可能ならば、年代の決め手にもなる。木像と巻子の内容が深く関わっているようだから、同時に作られたと思うのが自然だろうな。

まだ始まったばかりだ」

「これから先、第三の眼を啓く必要があるな」
「つまり東洋の睿智も捨てたものじゃないのさ」
「喉が渇いた」

epilogue 敗北はない

二人は茶室へと向かっていた。坐す。炭を熾し、茶釜を掛けた。炭斗(すみとり)から炭を取り出す。香を炉にくべた。野雁の羽箒の下に隠れていた桑柄の火箸を指にはさむ。湯気が立ってきた。碗を擱く。棗を開けた。竹の茶杓を捜す。白竹一本樋(しらたけいっぽんひ)の、中ほどに竹の節がくるよう誂われ、蟻腰(ありごし)という見掛、丁寧に漆拭(うるしぶ)き為(さ)れたその竹篦(たけべら)は棗(なつめ)を包んでいた裂(きれ)の傍らの畳の上に落ちていた。